

●名古屋二期会オペラ定期公演●愛知県文化振興事業団第123回公演●

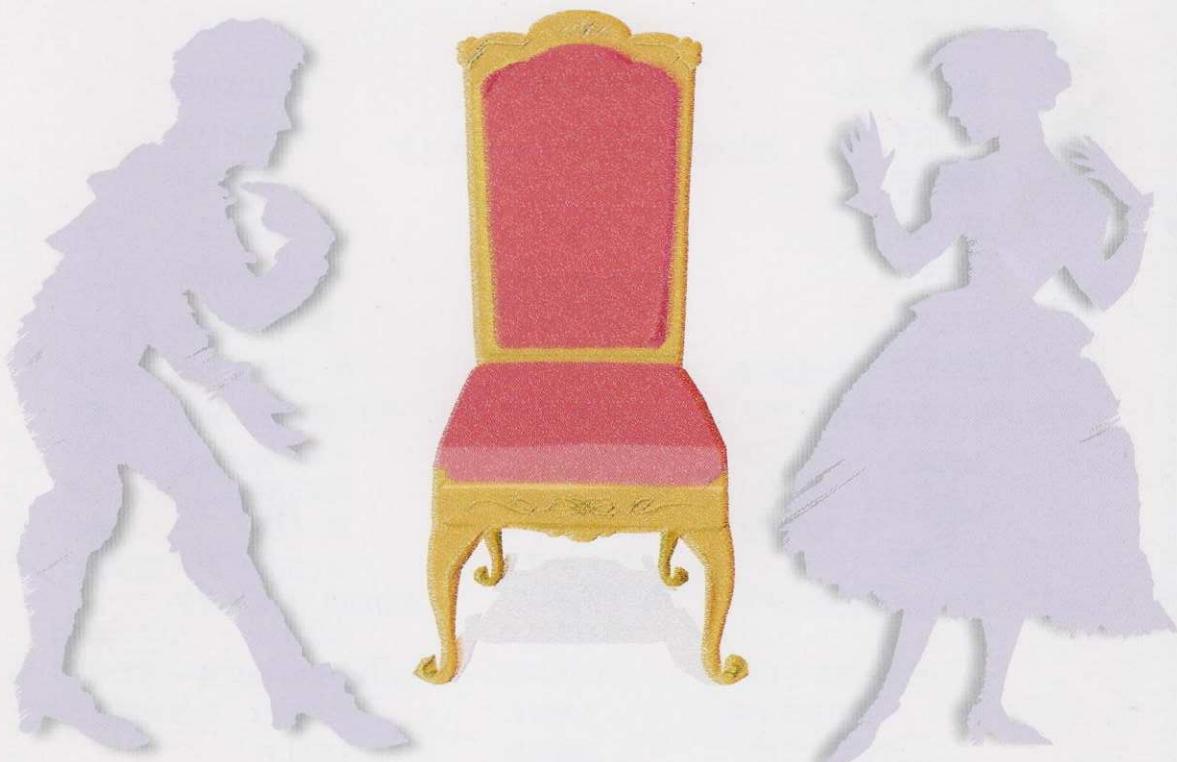
名古屋二期会創立30周年記念公演

Wolfgang
Amadeus
MOZART

オペラ

フィガロの結婚

KV492
全4幕



2001年11月10日(土) 開場16:15 開演17:00 終演予定20:40 11日(日) 開場12:45 開演13:30 終演予定17:10

愛知県芸術劇場大ホール



主催：名古屋二期会／ 愛知県文化振興事業団／ 愛知芸術文化センター 制作：名古屋二期会
助成：日本芸術文化振興会／(財)三菱信託芸術文化財団／(財)花王芸術・科学財団

●名古屋二期会オペラ定期公演●愛知県文化振興事業団第123回公演●

名古屋二期会創立30周年記念公演

オペラ

Wolfgang
Amadeus
MOZART

フィガロの結婚

KV492
全4幕

作曲：W.A.モーツアルト 台本：L.ダ・ポンテ 原語上演（字幕付）

総監督・小島琢磨 指揮・佐藤功太郎 演出・松本重孝

10th

キャスト

11th

晴 雅彦（客演）

アルマヴィーヴァ伯爵

山本哲也

加川文子

伯爵夫人

やまもとかよ

近藤義子

スザンナ

森本典子

石川 保

フィガロ

奥村晃平

岩田千里

ケルビーノ

小坂井直美

夏目久子

マルチエリーナ

谷田育代（贊助）

水谷和樹

バルトロ

水谷和樹

小山陽二郎（贊助）

バジリオ

神田豊壽（贊助）

石黒廣城

ドン・クルツィオ

鈴木俊也

佐藤栄里子

バルバリーナ

岡田かづみ

松下伸也

アントニオ

松下伸也

野村初江 佐藤玲子

花娘

水野麻美 長坂佐代子

アルマヴィーヴァ伯爵（アンダー）出來秀一



Le nozze di Figaro

合唱

グランフォニック

Ten. 佐々木正義 三ツ松 平 石井 清 伊東健光
Bas. 宮崎 嘉夫 井ノ口貴敏 黒田泰男 稲熊裕之

名古屋二期会合唱団

Ten. 星出 輝隆 野寄 竜也
Bas. 松原 敬 森 敦
Sop. 小野 陽子 兼房 美和 二宮 咲子 久米真紀子 水野 麻美 野村 初江
Alt. 池田 有希 野村 昌子 吉田 稚浪 長谷川恭子 長坂佐代子 佐藤 玲子

管弦楽

名古屋フィルハーモニー交響楽団

スタッフ

舞台美術	荒田 良	合唱指揮・副指揮	船曳圭一郎
衣裳	八重田喜美子	副指揮	西野 淳／吉住典洋／角田鋼亮
照明	児玉道久	コレベティール・プロンプター	揃 洋子
振付	藤田彰彦	音楽スタッフ	山本敦子 石山英明
音響	仙頭 聰		金森千晶 井上 茜
舞台監督	太田けんじ	大道具製作・操作	(株)つむら工芸
字幕	松本重孝	大道具操作	クライム
演出助手	池山奈都子	照明・音響	(株)若尾綜合舞台
舞台監督助手	山田ゆか	衣裳製作	東京衣裳(株)
	井上知也	字幕操作	(株)アルゴン社
	近藤朋文	小道具	藤波小道具(株)／高津映画装飾(株)
	野村八千代		The Stuff／Stage Crew BAU
	前田純代		Scène
	進藤由実	履物	(株)神田屋／浪原靴店
制作進行	米浜光代	かつら・メイク	(株)丸善かつら
		協力	The Stuff
		制作	名古屋二期会



ごあいさつ

本日のご来場、誠にありがとうございます。

私ども名古屋二期会は中部地方初の声楽団体「二期会名古屋支部」として発足、はや30年という年月が流れました。数名の声楽家で立ちあげた会も、今や200余名の構成員を抱える団体に成長しました。オペラ、歌曲のコンサートなど、様々な分野で活躍して参りましたが、特に1992年に愛知県芸術劇場大ホールの開館記念公演としてのオペラ「ピーター・グライムス」が、その年の全国の最高の公演であるとして第一回三菱信託賞を受賞しました事は我々を大いに勇気づけてくれました。この名古屋の地で本格的なオペラ公演を続けていく事は本当に大変な事だとつくづく身にしみて感じている今日このごろではございますが、この新世紀に入りましても地元オペラの灯を消してはいけないと会員一同頑張っていく所存です。

本年5月15日に、前理事長として長きに渡りご指導を賜りました牧定忠先生がご逝去されました。先生は我々の精神的な柱でいらっしゃいました。誠に痛恨の極みでございます。このオペラ「フィガロの結婚」は創立30周年記念公演であると同時に、「先生!、私どもは先生の教えを忘れることなく頑張って参ります。」と一同心をひとつにして、今後の発展を誓い合う公演であると思っております。

最後になりましたが、指揮者の佐藤功太郎先生とは、1973年の「コシ・ファン・トゥッテ」に始まり、15周年記念公演「蝶々夫人」、20周年記念公演「カルメン」等、深いご縁を頂いています。そして1999年の「魔笛」以来の、厳しい中にも名古屋二期会の行く末を親身になって考えて頂いている演出の松本重孝先生。両先生を始め多くの方々の協力を得て無事に幕が降り、そしてご来場の皆様方の大喝采あらん事を祈念いたしましてあいさつとさせて頂きます。

名古屋二期会副理事長 大野憲一



指揮 ● 佐藤功太郎

Kotaro Sato

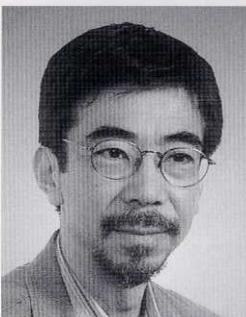
東京生まれ。4歳からヴァイオリンを始め、その後クラリネット、作曲、声楽を学んだ。東京芸術大学では指揮科に進み、渡邊暁雄氏に師事。1968年より1970年まで米国政府フルブライト留学生としてボストンのニューイングランド音楽院に留学し、レオン・バルザン氏の下で指揮法を学んだ。その間にアスペン音楽祭、タングルウッドのパークシャー音楽祭に参加し、レナード・バーンスタイン氏にも師事した。

1970年に帰国し、京都市交響楽団副指揮者、京都市交響楽団指揮者をつとめた後、1975年に文化庁在外研修制度により、ベルリン・フィルハーモニー、ベルリン・ドイツ・オペラに派遣され、ヘルベルト・フォン・カラヤンをはじめとする指揮者の下でさらに研鑽を積んだ。

1976年に再び帰国し、現在までに群馬交響楽団、京都市交響楽団、新星日本交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者、首席指揮者をつとめた。現在は、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の首席客演指揮者をつとめている。また、教育の分野では東京芸術大学音楽学部指揮科教授として後進の指導を行っている。

現在はわが国の主要オーケストラと活発にコンサートを行っており、そのレパートリーはバッハの宗教曲から現代の作品まで多岐にわたっている。特に邦人作品の演奏では高い評価を得ているが、その中のいくつかはライヴ録音としてCD化され、好評を得ている。また、1988年よりアメリカとチェコのオーケストラをほぼ毎年指揮し、それぞれ大きな成功を収めている。オペラ指揮者としては1972年に二期会公演「ラ・ボエーム」でデビューして以来、現在まで30作品以上の指揮をしており、「蝶々夫人」「カルメン」「ヘンゼルとグレーテル」「夕鶴」などはそれぞれ数十回指揮している。1990年にはフィンランドのサヴォリンナ・オペラ・フェスティバルで行われた二期会公演「春琴抄」（三木稔作曲）では、その的確な指揮により公演を大成功に導き、地元紙より絶賛を浴びた。1996年に指揮した「ひかりごけ」は、朝日新聞及び毎日新聞の1996年音楽回顧記事でもベスト・スリーとベスト・ファイヴに入り、音楽の友誌の1996年音楽会回顧記事でもベスト・テンの一つに数えられた。その後、「椿姫」「魔笛」「蝶々夫人」「ヘンゼルとグレーテル」「メリー・ウィドウ」「ザ・ロング・クリスマス・ディナー」「善光寺物語」「夕鶴」等を指揮し、いずれも高い評価を得ている。

2002年11月北京にて「ちゃんちき」を指揮する予定。



演出 ● 松本重孝

Shigetaka Matsumoto

東京都出身。東京室内歌劇場第一回旗揚げ公演に参加。舞台全般について、舞台監督の田原進氏に学ぶ。その後、二期会、藤原歌劇団、関西歌劇団等のオペラ150余公演の演出助手を務め、演出を栗山昌良、佐藤信、栗國安彦（故）の諸氏に学ぶ。

1984/85年渡伊、帰国後は主に藤原歌劇団を中心に外来演出家による公演で、演出助手として重要な役割を担ってきた。92年、藤原歌劇団公演「椿姫」の演出でデビュー。続いて同6月「カルメン」、93年1月「椿姫」、10月「ラ・ボエーム」を手掛け、94年には舞台装置を一新した「椿姫」、97年には初の日韓交流オペラ「リゴレット」、98年には神戸で「魔笛」、大阪で「ナクソス島のアリアドネ」等で成功を収めた。

2000年には「滝 廉太郎」の東京初演、2001年には「カルメリ会修道女の対話」の札幌初演、また大阪音大力レッジ・オペラ・ハウスの「領事」、神戸アーバンオペラ「フィガロの結婚」を演出。

その他、これまでの主な演出作品には、「ディドとエネアス」（札幌、堺）、「フィガロの結婚」（札幌、埼玉、東京、河内長野、神戸、津山、広島、博多、鹿児島）、「ドン・ジョヴァンニ」（堺）、「魔笛」（仙台、名古屋、神戸、広島）、「リゴレット」（台湾）、「椿姫」（浜松、神戸）、「ファルスタッフ」（大阪）、「カルメン」（横浜、浜松、神戸、鹿児島）、「ラ・ボエーム」（札幌、神戸、倉敷、高松）、「蝶々夫人」（大阪、神戸）、「カヴァレリア・ルスティカーナ」（札幌）、「パリアッチ」（堺）、「ヘンゼルとグレーテル」（博多）、「サンドリヨン」（京都）、「子供と魔法」（高松、広島）、「領事」（名古屋、広島）、「ポーギーとベス」（名古屋）、「白墨の輪」（京都、広島）等がある。

また、「オリイ伯爵」「イタリアのトルコ人」「サンドリヨン」「コルヌヴィルの鐘」「カルメリ会修道女の対話」「海に駆り行く者ら」など日本オペラ振興会育成部の修了公演等を多数手掛ける傍ら、札幌、名古屋、河内長野などのオペラ・スタジオを指導し、若手歌手の育成にも力をそいでいる。

合唱 グランフォニック

1994年5月、東海地区在住の東西4大学（早稲田、慶應、同志社、関西学院）のグリークラブOBが中心となって「東西4大学OB合唱団東海」を結成。1996年10月に三重県津市にて初めて演奏会を開催。その後、1998年1月に第1回定期演奏会、1999年4月に第2回定期演奏会を開催し、2000年10月には名称を「グランフォニック」と改称し第3回定期演奏会を開催。

現在「コンサートは、男声合唱のより高度な水準を目指すのは当然であるが、団員の自己満足ではなく、来場していただいた皆さんから聞きに来て良かったというものをを目指して努力する」、「団の特色として、当地区で「ドイツもの」（原語）をキチンと歌える合唱団を目指す」という団の基本コンセプトの下、2002年3月24日に開催する第4回定期演奏会に向けて40名の団員がそれぞれの仕事の合間にねつて厳しい練習を続けております。

名古屋フィルハーモニー交響楽団

・音楽監督	小林研一郎	・名誉指揮者	モーシェ・アツモン
・首席客演指揮者	沼尻 竜典	・ポップスオーケストラ・ミュージックディレクター	
・客演指揮者	武藤 英明	ボブ佐久間	

- 1966 結成、1967年10月、第1回定期演奏会を開催。
1971 音楽総監督に岩城宏之氏、常任指揮者に福島芳一氏を迎へ、オーケストラとしての体制を整えながら、技術を高めていった。
1978 名古屋市の出捐により財団法人となる。
1974 音楽総監督に森正氏、常任指揮者に荒谷俊治氏を迎へる。
この間日本を代表するソリストをはじめ、ブルゴス、ワルペルク、クルト・ヴェス、アイザックスターなどとの共演を行い、着実にオーケストラとして成長した。
1981 1月から音楽総監督兼常任指揮者に外山雄三氏を迎へ、演奏レパートリーの拡充、楽員の増強など、量と質の両面に於いて一層大きく成長する。
1986 創立20周年を迎へ、数々のコンサートをはじめ記念行事を成功させる。
1987 4月、常任指揮者にモーシェ・アツモン氏が就任。
1988 9月、初の海外公演を行い、パリ、ブザンソン、リヨン、アヌシー、ジュネーブの各都市にて好評を博し、文化使節としての役割を果たす。
1990 11月、第23回東海テレビ文化賞受賞。
1991 3月、愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。
1993 4月、名誉指揮者にモーシェ・アツモン氏、常任指揮者に飯守泰次郎氏が就任。
1995 4月、ポップスオーケストラ・ミュージックディレクターにボブ佐久間氏を迎へ、「名フィル・ポップスオーケストラ」として新しい事業を展開。
1996 創立30周年を迎へ、東京公演をはじめ数々の記念行事を成功させる。
1997 3月、創立30周年記念コンサート（サントリーホール）ライブ録音CDが、「文化庁1996年度レコード部門芸術作品賞」を受賞。
1998 4月、音楽総監督に小林研一郎氏が就任。
2000 4月、ウイーン・フィルの首席クラスのメンバーとの合同公演を行なう。
同年10月には2回目の海外公演となるアジア・ツアー（ブルネイ、シンガポール、フィリピン、韓国、マレーシア、ベトナム、タイ、台湾の8カ国・8公演）に招聘され好評を博す。

現在、名古屋市民会館大ホール、愛知県芸術劇場コンサートホールを主会場に、定期・特別演奏会をはじめとし、年間120回の演奏会を行っている。
(2001年4月現在)



「フィガロの結婚」演出ノート

松本重孝

ボーマルシェ作「狂おしき一日又はフィガロの結婚」というのが、モーツアルト作曲「フィガロの結婚」の原作の題名だ。“大変な一日”“大騒動の一日”というのが芝居の原題だ。どれほど大変な一日なのかは、芝居なりオペラを見れば分かることはあるのだが、説明するのは難しい。なにしろ登場人物の人間関係が入り組んでいる上に、ストーリーもめまぐるしく展開するからだ。一言で「フィガロ」のストーリーを説明することなど、とても出来ない。極めて簡単に言ってしまえば、さまざまな難関を乗り越えて、フィガロがスザンナと結婚する、という話なのだ。と思いたいが、そうは行かない。何故なら、フィガロはオペラの第三幕でめでたく結婚するにもかかわらず、第四幕が存在するからだ。ということは、フィガロが結婚するというのは、この作品の主題ではないということになるようだ。

では、この作品のテーマは何だろうか…。

芝居が大団圓を迎えるのは、伯爵の夫人に対する謝罪、そして夫人による許しを経てやっとめでたく幕となる。つまり、伯爵と夫人をめぐって起こる“一日の大騒動”という話なのだ。一方タイトルロールであるフィガロのこの一日の行動を追ってみると、不可解なことが沢山ある。

まず、話の発端となる新婚生活を始める部屋についてだが、フィガロは新居をどこにするか、妻になるスザンナに相談もせずに一人で決めてしまっていた。そして、それが伯爵の陰謀だと知られたフィガロは、またしてもスザンナに一言の相談もなしに、第一幕ですぐに結婚式を強行しようとして失敗する。それにも懲りずに、またもや第二幕でスザンナに相談もせずに嘘の手紙を伯爵に送りつけ、その混乱に乗じて結婚してしまおうと、これも一人で決めて強行し、第二幕フィナーレでまたもや失敗する。第三幕では裁判に負け、とうとうスザンナとの結婚は不可能になってしまう、と思いきや実は…ということがあって、めでたく結婚できることになるのだが、肝心のフィガロの才覚はどこでも発揮されない。フィガロは大事な時にいつも、スザンナの意見を聞かずに一人で行動しては失敗するのだ。そして、第四幕でそのしっぺ返しをスザンナから受け痛い目に会うことになる。

こうしてみると、フィガロはスザンナを人生のパートナーとして大事には思っていないようにみえる。男の人生の付属物としてしか女性をみていないようだ。このことは、伯爵にも、そして勿論バルトロにも言える。伯爵は夫人の悩みには耳をかさず放蕩三昧。そして自分のことは棚にあげ夫人を疑い責めたてる。バルトロに至ってはマルチェッリーナとの間に子供までもうけているながら、結婚を拒絶、何ら責任をとっていなかった。

封建社会で男尊女卑のまかり通る時代にあって、ボーマルシェは女性の権利の確立、復権を声高に主張しているのだ。そしてこの原作を得て、ダ・ポンテもモーツアルトも、女は男の付属物ではない、男と女は同等の権利を持たねばならないのだと、オペラのなかで語っている。第四幕でのマルチェッリーナのモノローグ、そしてアリアは男の不義、横暴を糾弾し、女の権利を主張して堂々たるものだ。ここにこの作品の主題が集約されていると言える。

ボーマルシェ、ダ・ポンテ、モーツアルトと受け継がれてきたフェミニズムの系譜を、しっかりと見つめたい。



● 名古屋二期会創立30周年記念公演 ●

刀口結婚

●名古屋二期会オペラ定期公演●愛知県文化振興事業団第123回公演●

名古屋二期会創立30周年記念公演

Le nozze di Figaro
オペラ

Wolfgang Amadeus MOZART

フィガロの結婚 KV492 全4幕

作曲：W.A.モーツアルト 台本：L.ダ・ポンテ 原語上演（字幕付）

総監督・小島琢磨 指揮・佐藤功太郎 演出・松本重孝

舞台美術◆荒田 良 衣裳◆八重田喜美子 照明◆児玉道久 振付◆藤田彰彦

音響◆仙頭 聰 演出助手◆池山奈都子 舞台監督◆太田けんじ

バルトロ

アルマヴィーヴァ伯爵

水谷和樹

晴 雅彦（客演） 10th

バジリオ

山本哲也 11th

合唱指揮・副指揮◆船曳圭一郎 副指揮◆西野淳／吉住典洋／角田鋼亮

10th 小山陽二郎（賛助）

伯爵夫人

11th 神田豊壽（賛助）

加川文子 10th

ドン・クルツィオ

やまもとかよ 11th

10th 石黒廣城

スザンナ

11th 鈴木俊也

近藤義子 10th

バルバリーナ

森本典子 11th

10th 佐藤栄里子

フィガロ

11th 岡田かづみ

石川 保 10th

アントニオ

奥村晃平 11th

松下伸也（賛助）

ケルビーノ

花娘

岩田千里 10th

10th 野村初江

小坂井直美 11th

10th 佐藤玲子

マルチエリーナ

11th 水野麻美

夏目久子 10th

11th 長坂佐代子

谷田育代（賛助） 11th

合唱・グランフォニック・名古屋二期会合唱団／管弦楽・名古屋フィルハーモニー交響楽団

開場16:15

開場12:45

開演17:00

開演13:30

終演予定20:40

終演予定17:10

2001年11月10日(土) 11日(日)

愛知県芸術劇場大ホール

入場料（全指定席）S席 10,000円、A席 8,500円、B席 7,000円、C席 5,000円 学生席（大学生以下）3,000円

■チケット取り扱い：名古屋市内主要プレイガイド／名古屋二期会／チケットぴあ ■問合せ先：名古屋二期会（052）752-2505



主催：名古屋二期会／愛知県文化振興事業団／愛知芸術文化センター 制作：名古屋二期会
助成：日本芸術文化振興会／（財）三菱信託芸術文化財団／（財）花王芸術・科学財団

*未就学児のご入場はご遠慮下さい。